

戦禍の記憶 伝承に危機感

貴重な証言の場「来年こそ」

小樽空襲76年

小樽市内で米軍機が市街地などを攻撃し日本人34人が亡くなった「小樽空襲」から15日で76年。戦争の悲惨さを知ってもらうため、毎年8月に小樽市内で開かれてきた「おたる平和展」（実行委主催）は、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、昨年に続き今年も中止となった。戦争を語り継ぐ人が少なくなる中、貴重な証言の場が2年連続で失われ、関係者は歴史の継承に危機感を抱く。

（有田麻子）

平和展は戦後40年の節目の1985年、高校教師だ

特に注力したのが、1945年（昭和20年）7月15日に起きた小樽空襲だ。嶋谷さんは空襲当日から10月

った嶋谷節夫さん（85）が教師仲間と呼び掛けて始まった。小樽高商（現小樽商科大）の学徒出陣や、戦時中の小樽の生活など毎年テーマを決めて8月の2～3日間、小樽市産業会館で開催。中断した年もあったが2019年に31回目を迎えた。嶋谷さんは「来場者同士で展示を前に会話が生まれ、自分の家にもこんなものがある」と持ち寄ってもらい、史料が増えていった」と話す。

までの市の火葬許可証を調べ、犠牲者の名前を探し出した。死亡者の名簿を展示したところ反響は大きく、「知人の名前を見つけて驚く人もいた」（嶋谷さん）。このほか平和展では、市民に空襲の体験を語ってもらったり、空襲を題材にした演劇を発表してもらうなどしてきた。

2018年に嶋谷さんから実行委事務局の仕事を引き継いだ高野秀子さん（62）は「小樽空襲は『自分の住む場所でもこんなことがあるのか』と自分事として感じてもらえる出来事だ」と伝承の意義を強調する。

平和展は、ピークの1991年は3日間で約1800人が訪れたが、徐々に減り、2019年は2日間で約300人だった。高野さんは、2年連続の中止で戦争の記憶の風化がさらに進まないか心配する。「来年こそは開催し、先輩方の思いを絶やさず伝えていきたい」と力を込めた。

おたる平和展2年連続中止



小樽空襲の名簿など手作りの史料を前に「戦争の経験を知ることが日本人としての道義的な責任だ」と語る嶋谷節夫さん



小樽空襲など戦時中の史料を並べたおたる平和展

2019年8月